

# 紺屋高尾

立川談春

「おはようございます。え、おはようございます」

「はい、誰。え、ああ久蔵じゃねえか、早いな。こつち入んな」

「え、おはようございます」

「何だ、早くから」

「えー、いろいろご心配いただきましたけど、今日親方に話をしようと思つて」

「何だい」

「あつしやね、所帯持つことになりましたね。かみさんもおうかと思つてね」

「へえー、おめえが、かみさんもうの。ほおー、朝一番いい話じゃねえ。おつかあ、お茶入れてやんなよ。うん、久蔵がな、かみさんもうんだつて」

「そうかい、へえー」

「で、どの女なんだ、俺の知ってる女か」

「知らないと思いますよ」

「ああ、そう。どこの女」

「へえ、吉原の女ですね」

「吉原？ なんだおめえ、吉原の女と一緒になるのか、ええつ。へえー、いや悪くはねえよ。うん、男の見栄だもんな、そりやいいけどもよ。ほおー、おめえ、よく吉原なんて知つてんな。いやいや、職人だからな、みんなほかのやつはちよいと錢稼ぎやすくに呑んじまうとかな、呑んで勢いがつきや吉原行つて、女買つて遊ぶつて、そういうことになつてるけど、おめえは真面目でな、女遊びもしねえし、酒だつてそんなに呑まないからあれだけ。ええつ、どうしたんだい。なんで吉原なんか知つてんだい。おめえ行つたことあるのか」

「いいえ、昨日行きました、夕べ、生まれて初めて」

「生まれで初めて？」

「ええ、生まれて初めて行きました。大門というのをくぐりましてね。兄弟子がね、花魁道中というのがあるから、こりやおめえ江戸っ子なら見とかなきゃしょうがねえんだから、おめえついてこいつて言われてね、それから見に行つたんですよ。したらねえ、親方

の前ですけど、驚きましたよ。この世の者とは思えぬような綺麗な女の人が、綺麗な着物着て、綺麗な髪飾りつけて歩いてくるんですよ。それをみんなが見るんですね」

「そんなこと、おめえに言われなくても知ってるよ、そうだよ。花魁道中ってみんな来るんだよ、な。綺麗だよ」

「綺麗だったんですよ。もう、いろんな人が来るんですけどね、みんなもうびつくりするようなね、震えるほどのいい女つてのはこういうことだと思ふような、綺麗な人がほとんどんどん歩いてくるんですよ。それを両脇に大勢人がいて見てね、ヤツとか言つて声かけてね。あつしゃ声も出ないほどにね、驚いちゃいました。綺麗でした。でね、中でね、アツこの人つて、そういうのいたんですよ」

「何だい、この人つて」

「ええ、誰って聞いたらね、三浦屋の高尾太夫だつて、そう言うんですよ」

「おお、おお、おお」

「で、こりゃいい女だつて、ええ、いい女なんです、これが。ええ、あつしゃ惚れました。うん、決めました。あの人と一緒にあります」

「おい、お茶出さなくていいよ。ええつ、訳の分からぬこと言つてやる、この野郎。ええつ、何だつて、三浦屋の高尾太夫で、おめえが、花魁道中で歩いてきたから惚れて、一緒になりますか？ おい、馬鹿なこと言うなよ、おめえ。えつ、馬鹿なこと言うな、おめえ」

「何です、馬鹿なことつて」

「馬鹿なことつて、おめえ分かんないから話してやるけどな。お

めえなんか吉原のこと何も知らなんだろ、な。全部話して聞かしてやるけどな、あそこは遊女三千人御免の場所と言つてな、女が三千人からいるんだよ」

「ほお、ほお、ほお、ほお」

「で、あの三浦屋の高尾つていうのは、今、全盛なんだよ」

「ゼンセイ？」

「分かんねえだろ。字で書くとな、全く盛ると書くんだよ。今一番勢いがある。分かりやすく言うると、今一番売れてるんだよ。うん、三千人女がいる中で、一番売れてる、一番男が惚れる、一番会いたいと思われてる、これが三浦屋の高尾太夫だよ、な」

「はあ、はあ、はあ、はあ」

「大名道具つて言うんだよ」

「大名道具？」

「知らねえだろ。いいか、そんなもんな、三浦屋の高尾なんて言つたらな全盛だ、吉原で一番勢いがあるんだからな、普通のやつお客になんかなりやしねえんだよ。大名道具つていつてな、大名の遊びもんだよ。遊びもなつて、ただ体売るだけじゃねえんだ、な。うん、頭が良くなくちゃいけねえんだ。それだけ身分のある人の相手をしなくちゃいけねえんだから、ね。ただ単にちよいといひ女が裸になつて横になるつて、そういうもんじゃねえんだ、うん。盆画、盆石、和歌、俳諧、みんなできなきやいけななんだよ。あととはまあ、山のように金を持つている商人の湯水のように金を使う人が、金に物を言わせてどうにか座敷へ呼ぶつて、そういうもんだよ、大名道具つてのは。うん、松の位の太夫職つていうんだ、入り山方に二つ星つていうの」

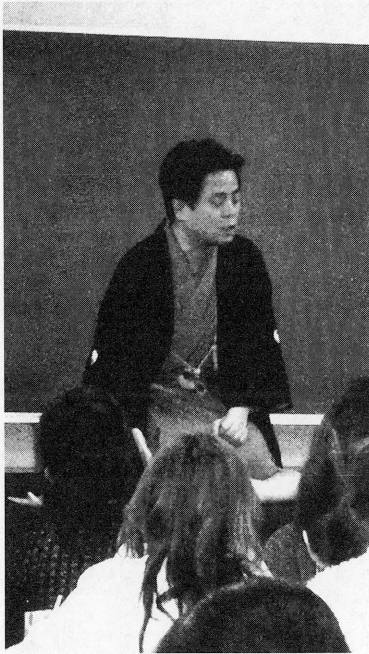
「言われりゃ言われるほど分かんないですけどねえ。それは何で

すか、入り山方に二つ星、松の位の太夫職」

「吉原細見」つていう本があるんだよ。早い話が、吉原つてのは、うちにはこういう女がいますって、全部出てるの、ね。その中に星がついてるの、星が。うん、二つ星つていて。えつ、今だつて星つけて喜んでる食い物屋があるだろ、あれと同じだよ。昔からあるんだ、そんなもの。向こうの西洋の方から渡ってきたもんじゃない、日本に昔からあった、ちゃんと。そのかわり今みたいなこういう星じゃねえぞ、黒い点な」

「はあ、黒い点がね、打つてあるんですか。ちよつと聞きますけどねえ、落語の筋と全然関係ないような気がするんですけど。何か一生懸命説明だけしてますねえ」

「そうそう、説明しとかないと分かんねえんじゃないかと思ってな。一応親切でやってんだけどな（笑）。何もこんなこと喋んなくたってスーッとこっちゃええいいんだけど、まあ俺なりの親切だよ」



「ああ、そうですね。じゃ、親切じゃしょうがないから聞きますけども」

「そういうもんだな。入り山方に二つ星、松の位の太夫職つてな。傾城傾国つていうんだよ」

「ケイセイケイコク？」

「うん。字で書くとな、城を傾ける、国を傾けると書く。いいか、分かりやすく言うと、さっき言ったみたいに大名道具なの。大名が行くよ。大名つていったら大変なもんだ。大名は銭を持って行くわな。例えば千両箱一箱持つていったとするじゃない、ね。で、高尾に会いたいと言つたとするだろ、千両置いてくるんだよ。で、会う。会つたらその日はそれで終わりだよ。で、明るる日にまた千両持つていくよ、な。今度は一緒に酒ぐらい呑むかもしれねえや、ええ。これでまた千両持つていく。高尾に名前を覚えてもらえ、枕を交わすようなことになる。高尾の色だとか、恋だとか言われるようになるまでには、もうすっかり金使い果たしちゃつて、国が傾いちまう、城が傾いちまう、一国の大名がだぞ。それでも、おめえ、高尾に会えた、高尾と情を通じたつていう男は、何も後悔もしなきゃ、男の本懐だつて喜ぶつて、それくらいに勢いがあるつて、魅力があった、そういう女なんだよ」

「はー、そうですね。じゃ、そういう女をかみさんにもらえるんだから大したもんですね」

「おめえ、頭おかしいんじゃないのか、おめえは（笑）。おめえ、紺屋の職人だぞ、染め物屋の職人なんだよ。おめえなんぞは高尾…、何を馬鹿、高尾をかみさんにする？ 冗談じゃない。おめえなんぞ高尾なんぞ会うこともできねえよ、えつ。高尾なんかおめえに会うこともできないの」

「それはそうじゃないですよ、親方勸弁してください、そういうこと言つて。あつしゃねえ、吉原行つて、金なしで、売り物、買い物でもつてどうにかしようつて、そういう見じゃねえんですよ。好きだから惚れたわけじゃねえですよ、自慢するわけじゃありませんけどね。歩つてたんですよ。歩つてたけど、ほかに綺麗な人はいたですけどね、あの高尾つていう人は違ひますよ。歩つて、目を見りゃ人間分かります。ええ、ああこの人はきつと親切な人だな、こういう人をおみさんに持つたらきつと幸せになれるな、そう思ったからあつしゃ所帯を持ちてえつて、そう言つてんですよ。だから親方の言うことは嘘じゃないでしょうから、吉原の決めていくと、しきたりでいくと、あつしみてえなもんが行つてもだめなんですよ。うけど、だから親方一緒に付いて来てください、これから吉原行きますから。で、言つてください。『高尾を嫁に欲しい』つてあつしが言つと、みんなが『馬鹿』とかいつて止めるんですよ。止めた時に、親方が出ていつて、『そうじゃないんだ』と、『こいつは吉原の花魁をおみさんにもらうわけじゃない、男が女に惚れたんだ。こいつは真心で高尾に惚れたんだからみんなぐずぐず言つちやいないと。この二人を幸せにしましょう』つて」

「そんな馬鹿なこと言えるか、こん畜生、ほんとに。しようがねえなあ。どうでもいい。あのなあ、及ばぬ鯉の滝上りつて言うんだ、覚えとけ、な。住む世界が違うんだよ、な。おめえなんぞ、高尾なんぞ会うこともできねえし、もちろん口交わすこともできねえし、駄目だよ」

「ええ、勸弁してください、そんな。それじゃおかしいじゃねえですか」

「何が」

「何で、人が人を好きになるつて、人が人を好きになつて、何でそんなぐずぐず言われなきゃいけねえんですか」

「あのなあ、人が人を好きになつてぐずぐず言われなきゃいけねえつて、言われるような時代なんだからしようがねえじゃねえか。身分つてもんがあるんだよ。こつちは紺屋の職人だ、おめえ。毎日指先真つ青に染めて、染め物して、幾らもらえるんだ、おめえ。向こうは違うんだ、おめえ。向こうはこんなになつてな、あちきは嫌でありんすといつたら、千両積まれようが、万両積まれようが、どんな男が行つたつて、それは將軍様は別かもしれねえけど、どんな大名が行つたつて駄目だつて、説明今したろう、おめえ。大名道具つていうんだから。だから、駄目だよ」

「せいじゃ、せいじゃ、あつしのかみさんどうなるんですか」

「知らねえよ、おめえのかみさんなんぞ。おめえが勝手に惚れたんじゃねえか」

「ええっ？」

「おい。もうもう分かつた。いいか、よく俺の目を見ろ。俺は今までおめえに嘘言つたことあるか」

「親方はあつしに嘘言つたり、騙したことは、ただの一度もありません」

「そうだろ、な。その俺が無理だからあきらめろつて言つてんだよ。あきらめろ」

「駄目ですか」

「駄目だよ」

「はい」

分かりましたと言つて、そのままドンドンドンと二階へ上がつていつて、ゴロツ横になつちやつて、で三日起きてこなくなつちやつた。

「タツ公」

「はいっ」

「おい、久蔵どうしてる」

「えっ？」

「久蔵」

「何です」

「何ですじゃないよ。近頃仕事場にも顔見せねえけど、どうなったんだ、あいつは。何してんの」

「いいえ、何だか知りませんよ。ずうーつと寝込んでいますよ」

「えっ？」

「ずうーつと三日前から寝込んでますよ、ええ。仕事にも来ませんね。で、飯も食いません。あの調子じゃ、めそめそ泣いてるだけでもって、さつと夜も寝てませんよ。様子がおかしいですよ」

「様子がおかしい？ ああそう。おかしいんじゃないがねえ。ああ分かった分かった。いいよいよ、いい、いい。俺が見についてやつから構わない。ああ、ああ、どいてろ、どいてろ。えっ」

タンタンタンタン、これね階段上ってる描写なの。(笑)

「よいしょ、この野郎。何だこん畜生、蒲団の中潜り込んで。おい、久蔵、起きろ、ほら。起きろよ」

「はい」

「何してやがる、どうしたんだよ、ええっ。みんな心配してるぞ、おめえ。飯は食わないし、仕事には出てこないし、夜も満足に寝てねえって。どうしたんだ、おめえ」

「あの」

「何だよ」

「仕事ができないんです」

「何で」

「何でって。だから、あの、親方に、あの、高尾のこと言われて」  
「おい、まだ高尾なんていつてんのか、おめえは。で、どうした」

「で、あの、親方嘘つく人じゃないですから、あの、嘘つかないから、忘れなくちやいけねえと思って、それで朝起きて仕事しようと思つて、飯食おうと思つて、茶碗に飯よそつて、おまんまこうやつて見ると、おまんまの一粒一粒が全部高尾の笑顔に見えてきて」

「怖いね、おい(笑)。気持ち悪いじゃねえかよ、どうしたんだい」  
「おまんま食えませんが、茶碗置いて、寝て、天井を見てたら、

天井の節穴から高尾があつしに向かつてにっこりほほえみかけるんです。目開いてちや寝られないからと思つて、目つぶると、また瞼の奥で高尾があつしのこと見てにっこり笑ってくれるんです。鉄瓶見ても高尾、座布団見ても高尾、何見ても高尾にしか見えない。親方の顔もだんだん高尾に見えて…親方」(笑)

「よせ、気持ち悪いいな、こん畜生、ええーっ。おい、よせよ。ちよつちよつちよつ、分かった分かった。ちよつと待つてろ、待つてろ。分かったよ」

タンタンタンタンタン。

「おい、おつかあ」

「はい」

「はいじゃないよ、おい、大変だよ」

「何が。高尾だろ」

「えっ？」

「高尾太夫のことだろ」

「何だい、高尾太夫のことだろって」

「久さん、何だろ、高尾太夫のことでもって思い煩っちゃって。早い話が恋しいだろ」

「おまえ、よくそんなこと分かったな」

「分かるよ、そんなこと分かんなくてどうすんだよ、この人は、ほんとに。えつ、だらしないこと言つて。そういうもんだよ」

「ど、ど、どうすんだよ」

「どうするつて、だからさあ、早い話が簡単じゃないかね。おまえさんが高尾に会わせてやるつて、そう言やいいんだよ」

「おい、馬鹿なこと言やなよ、おまえ。会わしてやるつて言うのは簡単だよ、あんなうぶなやつだよ、一本気な男なんだよ。俺が会わしてやるなんて言つたら、そりゃ元気になるかもしれねえけど、おまえ、後で会えるわけねえんだもん、ええつ。ほんとに会えると思つて、あいつ元気になつて、後で会えねえつて言つたら、もつとガクツときちやうじゃねえかよ。そりゃ駄目だよ」

「そんなことないんだ。分かんないの、馬鹿だね、この人は、ほんとに。おまえさんだつてねえ、あの子はねえ、うぶな子なんだよ、初めて女に惚れたんだよ、ねつ、覚えがあんだろ、おまえさんだつて。男が初めて女に惚れたなんてのは、麻はし参まみたいなものなんだから、ねつ。いいんだよ、会わしてやるつて言つて、今元気になりや。そうでしょ。元気になるよ、きつとあの子のことだから、ねつ。元気になるでしょ。で、元気になったらさ、あの子だつてその内世間が分かってくるんだから、こりゃ高尾にはなかなか会えないなと思うんだよ。そしたら、私の出番じゃないか」

「何だよ、私の出番つて」

「いいんだよ、幾らだつて町内に一人もんの女はいるんだよ、えつ。糸屋のお花坊だつてさあ、お花屋さんのおみいちゃんだつて、

何だつているんだ。何だ、会えるか会えないか分からないような、そんな高嶺の花の女に惚れるよりだよ、ねつ、同じ女なんだから、ちよつと手を伸ばせば届く女がいると思つたら、おまえさん、いつでもその高尾なんてえのに惚れるかい」

「そりゃそうだなあ。そうか。あつ、じゃ今元気にすりゃ、後はおまえに任しときゃいいのよ」

「そうだよ、任しておきなよ、私が全部心得てるんだから」

「そう、おまえ頼もしいね、おまえは。ああそうか、分かった分かった。いいよいいよ、ちよつちよつて言つてくりゃいいんだな。分かった。言つてくるよ」

「おい、久蔵。あんな、おめえあれだぞ、おめえあれだ。そんなにピーピーピー泣くほど高尾に会いてえんだつたらな、会えばいいじゃねえか」

「会えるんですか」

「えつ？」

「会えるんですか」

「会えるんですかって、だからおめえは会えるんだよ、おめえ。俺は嘘言つたことねえじゃねえか。会えるよ、ちゃんど。会えるよ」

「どうやったら会えるんですか」

「どうやったら会えるんですかって、おめえ。だから、幾ら入り山方に二つ星の、松の位の太夫職つたつて、売り物、買い物じゃねえか、あんなもの」

「幾ら持つたら会えるんですか」

「そりゃおめえ、安くはないよ、ねつ。鮎、菓子買に行くんじやないだから、餓鬼が。そりゃあそうだなあ、一晩だけだよ、一晩

だけで、どう安く見積つても、十五両ぐらい掛かるんじゃないか」

「ええーつ、十五両?」

「この野郎、十五両と聞いて肩落としやがった、こん畜生。諦めるか」

「いや、諦めやしませんけど、十五両なんてお宝見たことありませんから。第一そんな金があつしに稼げますか」

「稼げるよ。おめえ腕はいいんだ、な。無駄もしねえだろ、な。一人前以上の仕事をするんだから稼げる」

「どぐらいで稼げますか」

「どのぐらいで稼げるつて、おめえ。それこそ夜も寝ないで働いて、何も無駄しないで、貯めるだけ貯めてな、おめえの腕だったら、十五両だろ、三年あつたら貯めさせてやるよ、な。三年あればおまえは十五両貯められるんだよ、うん。で、十五両貯まつたら、高尾に会いに行けるんだよ。でも三年掛かるんだよ、おめえ。な、諦めるだろ」

「三年働いて十五両貯まつたら高尾に会えるんですか」

「えっ?」

「三年働いて十五両貯まつたら高尾に会えるんですね」

「そうそうそう(笑)。おめえ、会えますよ」

「こんな所で寝てる場合じゃありません」

「えっ?」

「働きます」

「働け」

「よしっ」

タタタタッと駆け下りていって、飯食つてなかったから、そのまま鮭の茶漬けで十三杯食つたというけど。

さあこれから働いたの何の。働いた。もう夜も寝ないで一生懸命働いた。もともと無駄はしない人ですから、男の一心だから、もう働くの何の。ただ働いているだけじゃ、なかなか人間こうは頑張れない。それはもう大変だ。ずっと掛け声掛けてね。三、三、三年働いて十五両貯まつたら高尾に会える、三年で十五両、十五両が高尾、高尾が三年、三年が十五両、十五両が高尾つて、毎日毎日ぎやあぎやあぎやあぎやあぎやあぎながら働いてたんです。

「親方」

「おつ」

「すいませんけど、久蔵の様子がおかしいですよ」

「またか、おい。何だよ」

「何だか知りませんけどね。十日ばかりね、三年で十五両、十五両が高尾、三年が十五両つて、そう言つてたんですけどね。昨日からピタツと言わなくなりましたね」

「おめえ、言わねえのがあたりまえなんだよ、おめえ。言つてる方がおかしいんだから、なあ。でも、あんなに騒いでいたのが急に静かになつちやうと驚いちゃうよなあ。おい、おつかあよ」

「はい」

「何か言わなくなつちやつたつて心配してるけど、どうしてるの」

「だから言つたじゃないかね。あの子だつて馬鹿じゃないんだからね。あんなこと言いながら一生懸命働いてたつて、会えるか会えないか分からないんだから、どうしようかなつて、もう迷いが出てきてるんだよ、ねえ。あと一歩だよ、私が糸屋のお花坊をくつつけるのは」

「おまえ、喜んでるだろう、おまえ。えつ、ほつといていいんだな。ああそう、ああ分かつた。うちのかかあがほつといていいつて

言つてから、何かそつとしとけ、うん。みんなで腫れ物にさわる、そう、そつだよ、そつだ。そつとしいた方がいいから」

「ああ、そつですか」

で、みんな忘れちゃつて、光陰矢のごとしつていいますけどね、月日の経つのは早いもので、あつという間に三年という月日が経つて…。

「おはようございます」

「はい。おつ、久蔵か、早いなあ。まあこつち入んな」

「ええ、どうも、おはようございます」

「何だい」

「ええ、あのー、実は今日あつし休みもらいてえつて」

「ああ、聞いてる、聞いてる。うん。おめえ、休まなかつたなあ、おめえ。毎日働いてたろう、おめえ。ええつ、どれぐらいいぶりの休みだ」

「三年ぶりです」

「三年。いやあ、おめえが一生懸命働いてくれてな、俺は親方だよ、文句言える筋じゃねえ、ありがてえつて礼を言わなくちゃいけないけどな、正直心配してたんだよ。あんなに根詰めて一生懸命働いて、体でも壊したらどうしようつて。たまにはゆつくり休んだ方がいいや。どこでも好きな所に行つてきな、両国でも、浅草の奥山でも。ああ、小遣いが要るんだつたらなあ、うちのかかあに言つて、一分でも二分でも持つてきな」

「ああ、ありがとうございます。あの、ちょっと聞きたいことがあるんですけど」

「何だい」

「ずーっと働いて、給金を親方に預けてました」

「おお、おお、おお、おお」

「あれ、幾らぐらい貯まりました？」

「それだ。おまえねえ、驚いた俺は。夕べ寝付かれなかつたんだよ、かかあと二人で。ああ、そつだ、そつや久蔵の給金どのぐらになるんだつて算盤入れさせてみたんだ。驚いた、おめえ。塵も積もれば山つてな、塵つて言つちや悪いけど、幾らだつたと思う。十八両と二分だ、おめえ、十八両と二分。ここで俺はおめえに相談がある、いいか。あと一両二分貯めると二十両になるんだよ、いいか。頑張つて、あとなあ、一両二分だけ働け。できるだろ、おめえ、三年の間一生懸命働いて十八両二分貯めたんだから。で、二十両貯まつたらなあ、おめえ国はどこだつて、上総湊、ああ房州の方が。な、二十両をな、おめえそれ持つて、俺が上下の着物こしらえてやるから、江戸の土産持つてな、で、国へ帰れ、国へ。うん、どうしてんだ。えつ、お父つあん死んじやつて、おつ母さんが一人だけ生きて、うん、兄貴が面倒見てる。ああ、行け行け。二十両持つてつてな、うん、おふくろの前にな、その二十両私が稼いだ、貯めた給金ですつて言つて出して、渡してやれ、おめえ。赤の他人にもらう千両、万両より、実の倅せがれにもらう二十両、親はどれだけうれしか分からねえや。な、親孝行してやれ。で、親孝行して、で、おめえがそのまんま房州だか上総湊で一生暮らしたつて、そりやそれでいいよ。だがな、おめえだつて長年江戸の風に吹かれてんだからなあ、えーつ、こんな田舎じやおもしろくもねえてんでよ、まあ江戸に戻りてえなという気持ちになつたら、一本槍でもつて俺のここへ来い。どつか行つちやだめだ、うちへ来い。俺はおめえのこと好きなんだ。おめえ親切だしな、一生懸命だし、正直だし、俺は好きだ。で、おめえがもしな、うちへ戻つてきたら、おめえ腕もいいか



ら、おめえに嫁を持たせてよ、で、うちの夫婦養子ということにして、おめえうちの跡取りにするよ。俺とかかあは、ちよつと生意気なこと言うようだけど、楽隠居つてんでよ、楽をさせてもらおうじゃないか、な。おめえに任せて、俺はもうあと心配することはねえから。分かったな、いいな。俺の話分かった、よし。十八両と二分貯めたんだから、あと一兩二分だ、頑張つて働けよ、分かったな」

「ありがとうございます。で、あのすいませんですけど、その内の十五兩使いたいですけど」(笑)

「おめえ、ひとの話何にも聞いてねえんだな(笑)。おめえ、この野郎、何だ十五兩使いたいていうのは、えーっ。おめえ十五兩つてどれだけの金か分かつてんのか、おめえ。おめえ、三年寝ないで働いて十八兩のうちの十五兩だよ。何、何か買うの」

「はい」

「何買うんだよ」

「ええ。へへへ、そんなこといいんですよ」(笑)

「何そんなことって、何がいいんだよ」(笑)

「そんなこと気にしないでください」

「気になるよ、おめえ。えっ、十兩盗めは首が飛ぶつうんだぞ、おめえ。十兩盗んだらスポーンと首切れられちゃうんだ、おめえ、十五兩だよ、おめえ。何か買うんだろ、言つてみるよ」

「ええ、えへへへ」

「言つてみる」

「いいですよ、いいですよ」

「よくないから、言つてみる」

「ああ、そうですか。そんなこと言つたつて、あつしが働いて預けてた錢なんですから、あつしが使うんですから、ぐずぐず言わな

いで、十五兩ここに出してください」

「おや、この野郎、生意気なこと言つてやがる。駄目」

「えっ？」

「駄目」

「何で」

「何でつたつて、駄目だ。いいか、俺はなあ親方つうんだよ。親方つてのはな親代わりつてことなんだ、えっ。おめえが一時の勢いでもつてそんな十五兩なんて錢使っちゃつたら、後でもつて間違つた、しくじつたと思つたつて、もう手遅れじゃねえか。俺にちゃんと話をしてみろよ」

「じゃ何ですか、あつしが働いて貯めた錢は、あつしは好きに使えねえんですか」

「使えねえよ、俺が持つてんだもん」

「要らねえや」

「要らないんだな、ほんとだな。おう、おたき、錢が入つてきたぞ。うん、何か好きな物買おう。おめえ帯が欲しいつて言つてたな。二人でもつてどつか湯治場でも行つてのんびり温泉でも……」

「誰がやるつて言つたよ」

「おめえ、要らねえつて言つたじゃねえか。だから、じれるんじゃないよ、おめえ。言つてみるつて、何だよ」

「たかおかうんですよ」

「えっ？」

「たかおかうんですよ」

「鷹を飼う?」(笑) 馬鹿じゃねえのか、やめろおめえ。鷹なんか危なくて、こうなつてんだ、おまえ(笑)。こんな目つき、キーツとして、目ピューツとすんだ。おめえ、お鷹匠になろうつてんじゃ

ねえだろう。どうせ飼うんだつたら、メジロとかジウウシマツとか、そういう可愛い飼え」(笑)

「あつしや寝ないで三年働いたのは三浦屋の高尾に会いてえから」

「おめえ、覚えてたの、おい。ちよつと待て、おい、どうすんだよ、おまえ。おいおい、ほらおまえ言ったじゃねえか。えーつ、おまえどうすんの」

「知らないよ、あたしや。おまえさんが会わせるつて言ったんだろ。そんなに覚えてるつて、あたしだつて思わないもん。おまえさんが会わせてやつたら」

「ふざけんな、こん畜生、この野郎。おーい、高尾に会うのか、久蔵」

「はい、会えるんですよえ」

「いやあ、あれなあ」

「はい」

「嘘だよ」

「嘘だ? ……」

「わわわわ、分かった分かった、分かったよ。泣くなよ、こん畜生。驚いたなあ、これ。おい、くどいようだけど、もう一遍だけ聞けど、おめえ。三年寝ないで働いて十八面と二分だよ、おめえ。一晩で十五面だよ、おめえ。これ全部使っちゃうんだよ、おめえ。いいのかそれで」

「駄目ですか」

「俺は好きだよ、そういうのは。おめえ、江戸っ子らしくないけれどよ。ただなあ…。いやいや、ちよつと待て。いいかい、銭はある、嘘はつかない、銭はあるんだ。だけどな、金持つてるから会

わせてくださいつって、おめえ紺屋の職人だ、身分が違うんだよ。金幾ら持つてつたつて、紺屋の職人じゃ会わしちゃうねえんだ。吉原には吉原のしきたりつてもんがあつてな。高尾に会うには、あれだけの女だからいろいろと格式つてもんがあつて、ここを通して、ここを通して、ここを通して、いろいろあるんだよ。俺は職人したぐらいのもの、それがなあどうも詳しくねえんだよ、なあ。だから、銭はあるけど、いろいろ知恵絞らなきゃいけねえから考えてんだ。ああ、そうだ。おいおいおい、ほらあの裏によ、藪井竹庵つて医者がいたる。な、いたよなあ、うん。えつ。いやあ、あれは藪井竹庵つて名前なぐらいだから駄目なんだよ、医者は下手なんだよ。医者は下手なだけどな、何か金持ちのお供でもつて、よく吉原へ遊びに行つてつて言うじゃねえかよ。ええつ、そうだろ。あの人だつたら吉原のこと詳しいじゃねえのか。ちよつと行つて呼んで来い。えつ、何、表通る? ああ、通る通る。先生、先生、こつち、すいません、先生、こつち、こつちですよ」

「はいはい、えーお呼びですか。えー、どなたの具合が悪いかな。あー脈を診てしんぜよう」

「いい、いいです、先生。脈なんか診ちゃ駄目だよ、先生。先生にうつつかり脈なんか診せたら、いつ殺されちゃうか分からないんだから。病人だつたらほかの医者に行きますよ」

「な、何ですよ。何です」

「いや、何ですじゃねえ、先生。実はねえ、実は先生ねえ、恥ずかしい話なんですけど、笑わずに終いまで聞いてもらいてえんですけどね。こいつ知ってますか、こいつ。久蔵つていうんですよ、うちの職人で」

「ああ、久さん、よく知ってますよ。親切でね、正直…」

「ああ、知っててくれたらありがたいですけど、この野郎が、事もあろうに、三浦屋の高尾太夫に思いを掛けましてね。で、会いてえっていうんでね。一心だ、執念みてえに貯めた金が十八両と二分あるんですよ。でね、十五両貯めたら会わしてやるって、あつしはついポロツと口がすべって言っちゃったんだよ。言わなきゃならぬえようなこともあつたんです。この野郎ね、会えねえって言つたら倒れちゃって、飯も食べねえし、夜も眠れない、ほつとくと死んじやうって話になっちゃったんですよ、ね。こいつね、会えると思つて一生懸命三年働いたんですよ。ここでもし会えないというと、また倒れて、こいつ死んじやうかもしれないですよ。こいつは病人なんです、ええ。日本中にねえ、薬で病人を治す医者は随分いますけどね、女郎買いで病人を治す医者つてのは先生しかいねえんですよ。えつ、先生が腕がいいつてんで評判がいいんだから、ほんとに」

言つてることがよく分かりません。

「そりゃあ分かりました、大体話は分かりました。久さんこつち見てごらん。うん。おまえさん何かい、高尾に会いに行くの」

「はい、会いたいです」

「ああ、そう。はい、分かつた。うん、幾ら、十八両と二分、ああそうですか。ああ、まあ足りないかもしれないが何とかなるでしょう。駄目なら親方少し足してください。それはいいんだけどね。親方は分かつてるだろうけど、いいかい久さん、あのねえ、行くのは構わないけども、親方から聞いてると思うけど、どんなにお金があつても、紺屋の職人つてえことじゃ向こうは高尾に会わしちゃうれないんだ。会わしてくれないから、分かつたね。だから、おまえさんは紺屋の職人じゃないんだよ」

「はあ」

「何かに化けなきやいけない。いろいろ考えます。ああ、こうしよう。おまえさんを野田の醤油問屋の若旦那ということにしよう。お金がたくさんある醤油問屋の若旦那」

「は、お金たくさんあります、十八両と二分ありますから」

「いやいや、十八両と二分はそりやおまえさんにとつちやあれかもしれないけど、いいね、まあまあ何でもいちゃ、で、おまえさんはそうなる、いいね、わかつたね、うん。でね、おまえさんを若旦那にするつてえことになる、鬻鬻の形からみんな変えなきやいけないから、若旦那風の鬻鬻の形にして、それから親方の持つている着物つてのはみんないいものだとは思いますがねえ、若旦那だから、ちよいと派手目なものをね、染め物屋に行つて借りてきておくれ。でね、いいかい、日が暮れたら私は迎えに行くから、それまでに支度を整えてください、分かりましたね、親方。いいですね」

「ええ、じゃひとつよろしくお願いします」

「じゃあ、日が暮れたら迎えに来ますから」

「普段が親切な人ですからね、この久蔵さんつて人は。」

「おーい、久蔵、こつち来い、俺がやってやるから」

「久ちゃん、こつちおいで。着物はわたしが借りてきてあげるから」

「つて、みんなが寄つたかつて親切で、どうにかこうにかその成り、形だけは若旦那に見えるような形をこしらえてくれた。日が暮れる。」

「ああ、先生先生、お待ちしておりました。どうぞ」

「はいはい。おー、いいですな、はいはい。ああ、どこから見ても立派な若旦那になった。でね、久さん、ここから大事なんだよ、

いいかい。あのね、向こうへ行っておまえさんは一言も口をきいちゃいけない。若旦那には若旦那が使うような言葉つてもんがあるんだ。おまえさんはお職人だから、お職人が使うような言葉だろ。その言葉が変わつちまうとおかしいってのはすぐに分かるからね。何を言われてもおまえさん口きいちゃいけない。でね、何も言わないと変だから、何か言われたらね、あい、あい、つて。まあ、はい、はいだな。あい、あい。これね、重ね言葉といつて大変鷹揚に聞こえる。お里が知れないから。あいあい、あいあいって頷いてりやそれでもいいからね。それからね、その手を出してごらん、手を。そうそうそう。これな、藍色に染まった指先、紺屋のお職人だから仕方がないけど、こんなものを出した日にや、すぐに醤油問屋の若旦那じゃないつてのは分かちまうから、手は何があつても出しちゃいけない。この袂のところは手を入れてね、いいかい、この中に入れて。で、何か言われたら、少し反り身になってあいあいって言つてりや、おまえさんも立派な若旦那だから、分かつたね。それからね、向こうへ行つて私のことを先生なんて言つちやいけないんだよ。今日はおまえさんが御主人で、あたしはおまえさんのお供だから。あたしがおまえさんを若旦那、若旦那と言うから、おまえさんはただ黙つて、あいあい、あいあいって、そう言つてりやいいんだ、分かつたね。そうしないとね、お金を出して高尾に会つたところでもきけなさんだから、いいね、分かつたね。じゃあ稽古しよう。言つてごらん。えつ、言つてごらん」

「は、先生」(笑)

「だから、先生つて言つちや駄目なんだよ、ね。あたしのことは藪井竹庵と呼び捨てにするんだ」

「はつ、そうですか。えつ、えつ」

「ヤバイ」

「ヤ、ヤブ、ヤブヤブ、ヤブ、ヤブ、ヤブ、ヤブ」

「何だよ、ヤブー。藪井だよ」

「ヤバイシヤ」

「藪医者じゃないよ。わざと言つてんじゃないのか、おまえさん。大丈夫かい。うん、そうそう、手を入れて、そう、ちよつと反り身になつてね、何か言われたら、あいあいって言つてごらん。うん、そうそう。うん、そうそう。それでいいからね。分かつたね。それじゃあねえ、親方出掛けますから」

「先生ね、あのねえ、この野郎は一本気な野郎でねえ、生まれて初めて女に惚れたんですよ、ええ。あつしらみたいになえ普通の男だつたらねえ、高尾を嫁にもらいてえとか、高尾に会いてえなんて、そんな途方もねえことを考えやしねえんですよ。この野郎は、その一心でもつてね三年頑張れちゃつた。そういう男ですからねえ、何とか一目会わせてやりてえんで、どうぞひとつよろしくお願い……」

「ああ、何とかしましょう、大丈夫です」

「久蔵、分かつたな、おめえ。先生の言うことを聞くんだぞ、手出しちゃいけないんだぞ、おめえ。手出すな、この野郎。手出さないで、あいあい、あいあいって言つてんだぞ。わかつたな、この野郎。振られんな」

「ええ、大丈夫だと思ひます、いい天気ですから」

「おまえ、何にも分かつてねえだろう(笑)。おまえねえ、もう言つても駄目だ、先生。金持ちつてつたつて、振られたら会えないうつてことが分んないんですからねえ。ええ、よろしく……」

「分かつた分かつた、分かりました。じゃあ、久さん行こうか」

「ヤバイ」

「まだ早いよ」

神田お玉が池、紺屋六兵衛の家を出て、二人でもって連れだつて、お茶屋を通して……。

お茶屋というのは、面倒臭いからもう説明しないや、後でまた先生に聞いてください。どういったらいいのかなあ、みんなが想像するような風俗の店とは違ふの。ただ、みんなが想像するような風俗の店というのがどういふものかなのか、俺には全く分からないけど（笑）。本当に職人なんかは相手にしないの。「職人つて何」といつたら、これは語弊があるから後で先生に直してもらつた方がいい、サラリーマンです、早い話が。もつと簡単に言ううと、豆腐屋の子は豆腐屋にならなきやいけなしい、酒屋の子は酒屋にならなきやいけなしい、魚屋の子は魚屋にならなきやいけなしいわけですよ。変な話が、自転車屋の子が文教大学入つて、文教大学から東大へまた入り直して、そんな酔狂なやつはいねえだろうけど、そういう時代じゃないから。

で、まずお茶屋といふところへ行つて、そこで呑む。料亭といふのかな、まあ明治になると女郎屋の貸座敷といふ名前になりますけど。そのお茶屋といふのは、早い話がきちんとした店、大店、中店、小店といつて、大きな立派な店がある。そこへ行くときは、いきなり行つて、こんにちとはいふわけにはいかないんですよ。そこへ行くには、まずここのお茶屋さんに行つて、お茶屋さんで金を使つて、お茶屋さんから「さて、お名指しは」と聞かれて、このお茶屋さんからこの大店へ行つて、「誰々花魁はお客様でございますか、本日空いていますか」と。と、「あなたが言つてきてくれたんだつたら出しましょう」とか。それが、だから中途半端なお茶屋から行くくと、「おたくとうちはつき合ひがないから駄目だ」と、そういう

のだから。

で、行つた。で、お茶屋のおかみさんが来た。

「先生、お名指しは」

「あのねえ、無理でもあるうが、三浦屋の高尾太夫をねえ」

それを言われて、お茶屋のおかみが驚いちゃつた。三千人で一番なんですから。今、誰が一番人気があるのか知らないけど、浜崎あゆみ、大して変わらないんですよ、本当に。だつて、芸能界がないんだから。で、売れてるやつは誰がいるんだつていつたら、歌舞伎の役者だけなんだから。あれは男なんだから。だから、芸者というのは、みんなにとつてはおばあさんが三味線引いているものかもしれないけど、芸者というのはね、分かりやすく言ううと、今の映画女優から、タレントから、モデルから、ありとあらゆるものの中のトップみたいなもの。じゃ、こつちの花魁といふのは何かといふと、吉原といふところは、江戸の粋といふ言葉があるでしょ、建物から何から全部江戸の粋を集めきつたところだから、分かりやすく言ううと、この花魁といふのは嘘じゃないんだから、大名道具といつて、大名が遊びに行つちやうぐらいなんだから。そこへもつてきて、一番売れている人の高尾太夫に会いたいつて、そんなものあなたその日に行つて会えるわけないでしょ。その日に行つて会えるわけないんだから、そんなの高尾に会おうと思つたら、三ヶ月ぐらい前に電報打つて。電報つても古いけどね。（笑）

言われて驚いたけど、この藪井竹庵といふ医者は馴染みで、馴染みつていふのは顔見知りで、吉原のこともよく分かつていふと。何よりこのお茶屋といふのは、花魁を紹介するのが、紹介業みたいなのが商売だから。「それは先生、いきなり来て、高尾太夫はないじゃありませんか。無理ですよ」と言うことが、自分の店の看板に傷

がつく、暖簾に傷がつくから、とりあえず聞くだけは聞いてみようというので、「先生、ご無理でもございませうが、行つてまいります」と言つて行つたら、何と空いているという、会うという。

そりやそうだ、ここで会わないと言つたら、この話これで終わっちゃうんだからね。(笑)

会う。空いていたんだよ。

こは嘘だ、きつとね。ただ、落語家は幾らかリアリティを持たそうと思つて、こういうカットを入れる。高尾がこう言つたそうです。「いつもお堅いお客はんばかりでは気が詰まりんす。たまにはそのような柔らかい若旦那はんの相手がしようざんす」と言つて。

これは郭言葉といつて、これは説明するのが大変だね。郭言葉といつて、どういふことかといふと、日本中から来るでしょ。日本中から来るから、みんなそれぞれ方言があるわけですよ。そうすると、何でもかんでも方言丸出しじゃいやじゃないですか。どんな綺麗な人でもあき竹城みたいに喋つてたら嫌でしょ(笑)。「なあにすんだ、こん畜生、そんなとこ触るやつはねえべつちや」なんていうのは嫌だから(笑)。お里が知れないように、吉原へ来たたらこの言葉を使いましようといふのが吉原言葉、里言葉。小沢昭一さんが、今から十五年ぐらい前に、十年ぐらい前かな、うまいことを言つた。ちようど女子大生で流行り出した頃、「何でえー」「ほんとー」「嘘でしょー」「馬鹿みたい」といふのは、現代の里言葉だと小沢昭一さんに教わつたことがありますけどね。そつちにはあまり興味がないでしょうけど、今、職員の皆さんへ対するプレゼントでした。(笑)

会うという。結構な箱提灯に送られて。意味は分からないだろうけど、音だけ覚えておいてください。こういう音で言うとなんか引つかからずスツと入るといふのは、意外とこの腕だつたりします

けどね。

結構な箱提灯に送られて三浦屋へ行く。通されて。

自分の部屋がある、もう花魁ぐらいになつたらね、そりやそうだ。大きな部屋にこーんなもんじゃない、こんな厚い座布団、三枚重ねて、そこへピヨコンと座らされて、周りには誰も人がいない。先生は先生で別のところへ行つてゐる。久蔵一人だけもつて、そこにピヨコンと座らされて、もう周り見りや、今まで見たこともないような絢爛豪華な調度品があつて、香の匂いが立ちこめて、えらいことになつたと思つてガタガタガタ震えてるつてえと、その内に、衣擦れの音とともに、ね、いい表現だけど、衣擦れの音とともに禿に手を引かれてスツと入つてきたのが三浦屋の高尾。

礼儀があつてね、お客さんの前に来るといふと、こういう形でね。見たことないかな、俺がやるとあまり色っぽくないけど、横座りつていつてね、なぜか花魁といふのはこう向くの。これが合図なんです。こつちに向きやあいんだけどね、これは江戸衆のポーズ。客はこつちにいるんだよ。最初の礼儀の座り方はね、こんな汚くないけど、俺踊りやつてないから形汚いけどね、ピタツと座つてゐる。さあここからだ、ここからはみんなの想像力だ。

三年の間、会いたくて、会いたくて、寝ないで働いて、惚れて惚れて惚れ抜いた女が目の前にピタツと座つた。

今と違つて写真はありません。もちろん映像もありません。ただ一目、自分が花魁道中のあの不夜城といわれる吉原の桜がサアツと散つている中をスツと歩いていった女、これは俺の一生の女だと決めた、その思いだけが強烈に残つてゐる。実物が目の前に、三年ぶりにピタツと座つた。そりや震えがガタガタ激しくなつてきた。

礼儀として吸いつけ煙草、今はやらないのかなあ。昔、俺達が皆さんの年の頃には、暴走族の女の子がよくやってたよ。自分の彼氏に、煙草をこうやって火をつけて渡すの。それをまた、この辺根性焼きだらけのやつ、こんなになっちゃってるやつが吸ってね(笑)、「うまいよ」って言ってるの。やってることは変わらないんだよ、何百年経っても。

煙草をこう一服吸いつけて、久蔵に向かってにつこり笑って、「主、吸いなんし」と差し出してくれた。これは男として吸いたいです。だって、口移しなんだから。これは吸いたいよ、吸いたいけど、真面目なんだ、この久蔵という人は。手出しちゃいけないって言われている。手出しちゃいけないけど吸いたい、どうしよう。吸いたい、吸いたい、どうしよう。考えて、考えて、このまんま、こうやってキセルをもらって、火玉が踊るほどこう吸って返した。変な客だなと思うけど、そんなことで微動だにしないような女じゃありません。いろんなのが来るから驚きやしない。何を聞かれても、花魁に何を問われても、ただガタガタ震えて、うつむいて、目も合わさずに震えながら、あいあい、あいあいとしか答えられないこの朴訥な男を、純朴な男を、高尾が何をどう感じたのか。何とその晩見事にもてなしてくれて、男にしてくれた。

どうだ、古典落語の表現は綺麗だろ(笑)。やつちゃったって言ったら何んにもならないものね。気を遣い過ぎだな。ここは止めないでサアツといかないか。

寝た。寝るわな。そりゃそうだよ、幾ら十五両払ったからって、一晚中エツチさせてくさいって、そんなやつじゃないんだからね、寝てたんです。寝るけど寝られない。ここで思いが叶ったから、何と高尾と枕を交わすことができた、情を通じることができたから、

俺の想いは叶ったから、気持ちよかったから、疲れたから寝るって言うような、そんな男だったら、三年の間一人の女のために寝ないで働いたりはしない。花魁は寝てるのかもしれない。寝てるふりをしてたのかもしれない。そんなことも分からない。でも、横に寝て体は小刻みに震える。念じることはただ一つ、カラスよ鳴くな、夜よ明けるな、このままこの時間がずーっと続くんだったら、俺はこのまま死んでもいいと思ってる久蔵の願いというのは空しく消えて…。昔は、今でもそうかもしれないけど、朝が来る時はカラスが鳴く、カラスが鳴いたらもう朝だ。ニワトリなんか江戸にそうはいないからね。

カラスが鳴いた。寝ていたと思った高尾がすつと立ち上がると、昔は寝顔を亭主に見せるのは婦人の恥と言われたから、そのまんまスーッと開けて、隣座敷へ行くつてえと、綺麗にお化粧をして、そりゃ吉原で全盛ですから、金もあるし、ちゃんとしてるんで、また着物を着替え直して、久蔵が寝ているところを、こう煙草を吸いながら、久蔵の顔を見ながらジリジリと煙草を吸っている。もちろん久蔵は寝てません。ああ、見てるな、花魁は俺を見てるなと思うけど、目をつぶって寝たふりしている。起きて「おはようございませう」と言っているのか、「ちよつとすいません、おしっこ」って言っているのか分からないから、ただガタガタ震えてると、しばらく経つと、高尾が「主、お目覚めござんしよ、一服吸いなんし」と寝ている、狸寝入りの久蔵を見て、分かって煙草を出した。真面目なんだ、また一緒、手を出さずにこのまんま、煙草をこう吸って、こう返す。

「わちきのような者をお名指しでうれしくござんす。お裏はいつ

「ざあますか、主」

「はい？」

「お裏はいつぞますか。」

「オウラ？」

「今度いつ来てくんなますか」

「ああ、そう。はい、三年経つたらまた来ます」

「三年？ 長うざんしょ。もつと早う来てくんなまし」

「三年経たないと来られないんです」

「どうして」

「金がないんです」

「ご冗談ばかり。主は野田の醤油問屋の若旦那」

「いえ、違うんです…。あの…。すいません。全部、それ嘘だつたんです。あつしは実は、あのー、神田お玉が池紺屋六兵衛の職人で久蔵、紺屋の職人なんです」

「わちぎを騙したんざあますか」

「いいや、あの、話終いまで聞いてください。三年前に、あのー、花魁の姿、花魁道中で一目見て、あつしや、あの、笑われるかもしれませんが、惚れたんです、好きになった。いやあ、綺麗だから好きになったわけじゃねえんですよ、ええ。ぱつと見た時に、ああ、この人は親切な人だなと思つたんです。この人だつたら、この人だつたら、あつしや幸せにしてえと思つて、惚れて、親方に相談したら、あつしや吉原のこと何も分からないから、馬鹿野郎つて頭からどやされて、及ばぬ鯉の滝上りで、松の位の太夫職、住む世界が違う大名道具つていう人なんだから、おめえ所帯持つどころじゃねえ、会つことだつてできねえと言われて。うちの親方は嘘つくような人じゃありませんから、そうなんだ、諦めなくちゃいけないんだと思

つたんですけど、どうやっても諦められないんです。そしたら、みんな周りの人はいい人で、じゃあ会わしてやるから働け、三年働け、十五両貯めろ、十五両貯まったら必ず会わしてやるからつて。無理だつてのはあつしが一番分かつてました、ええ。会えるわけねえんだつてだんだん分かつてきました。でも、それにすがらなきやあつしは生きていけねえと思うから一生懸命働いたんです。諦めてたんです、無理だと思つたんです。でも、十五両貯まったら会いたくないんです。また無理言つたんです。そしたら、周りの人はみんな親切で、何とかしてやるうつて、野田の醤油問屋…。どうしよう。騙したわけじゃねえんですが、騙さねえと、騙さねえと会わしてくれねえつてんだから、勘弁してください。あの…。会えました。おかげさまで会えました。ゆんべ寝てる時にずつと夢じゃねえかと思つたけど、夢じゃねえです。会えました。もう、もうこれ以上嘘はついてらんねえと思つて、どんなに叱られるか分からねえけど、みんなあんなにお膳立てしてくれたのに、あつしが嘘ついちゃいけないんだけど、ほんとのこと言わなきやいけない、で喋っちゃつた。頼みが一つだけあるんです。一生懸命働きます、はい。二年で十五両貯めます、また来ます、会つてください。もう全盛の花魁ですから、あつしが金貯めて来たつて、どこのお大名の奥方様になつても、あつしは金貯めて来たつて、どこの商人のお妻さんなつても、あつしは金貯めて次来た時に花魁がいなかつたら、あつしやあ今日が最初で最後、それつきりです。でも、元気で生きてりや、この広い江戸の空の下で、いつかどつかで会えると思います。お願いがあります。その会えた時に、あつしが「花魁」つて言つたら、木で鼻くくつたようにブイツと横を向いちゃまわねえで、一言でいいんです、あつしの顔見て、にっこり笑つて「久さん、元氣」つて、そう言つて



くれませんか。その一言であつしは生きていけます。すいません、騙したわけじゃないんです、勘弁してください」(涙)

ペコペコペコ頭下げてゐる久蔵を、キセルの吸い口を額に当てて、気だるそうな顔して聞いてた高尾が、話聞き終わるとブイッと横を向いてポーンとキセルを放ると、ポロッと一滴涙を拭つた。

「主、そのお話ほんとさあますか」

「嘘言つたつてしょうがない、見てください、ほら、こんな藍色に指先が染まつているから、だから手出しちゃいけないえつて言われて、あんな変な形でキセルも吸つたし……」

「わちき来年三月十五日年季が明けるんざあます。その時には、眉毛落として、齒にかね染めて、主の元に参りんす。わちきのような者でも、主の女房はんにしてくんますか」

「は、はあ？」

「来年三月十五日年季が明ける、籠の鳥でなくなるんざんす。吉原から離れてよくなるその時には、眉毛落として、齒にかね染めて、主の元へ参りんすに、わちきのような者でも主の女房はんにしてくんますか」

「はいはい、はいはい」

「わちき、主の女房になりたい」

「そんなこと言つと、こんな男だからあつしや本気にしますから」

「主の正直に、高尾は惚れんした」

後日の証拠にと、自分が挿していた簪を懐紙でこすり拭いて持たせてくれて、手文庫という、引き出しみたいなもの開けて、何と金包み三十両、これを持たせて、亭主の待遇で、この人は私の亭主なんだよという待遇でそのまんま何も言わずに吉原からすーっと帰してくれた。こりや、久蔵は驚いちゃつた。三十両もらつて、簪持つて、

何が何だか分からない。ふわふわふわするつてえと、そのまんまふわふわと空を飛んでるように親方のうちに帰つてきて、

「たたいまわわわつした、たたいまわわわわわつした」

「何だ、相撲の巡業が来たのかい、おい。えつ、行司か。売れねえのか、切符が、買ってやるよ、おまえ。えつ、何。誰だよ、何だい、えつ。久蔵？ 久蔵帰つてきたのか。おい、久蔵」

「たたいま戻りました」

「帰つてきた」

「はい」

「へえー、そうかあ。どうだつた、振られたろう」

「いや、いい天気でした」

「何言つてんだ(笑)。そうじゃねえよ、おめえ。高尾に会えなかつたんだろ」

「いえ、会えました、会えました、会えたの」

「おめえ、分かんねえんだ。あの、高尾が出てくるまでに、振り袖新造とか、留め袖新造とか、別の女が出てくるの、ね。おまえはそれを見て高尾だつ。高尾じゃない」

「そんなこと、高尾来た、高尾。高尾来て、あつしの顔見て、じつと見てにつこり笑つて『一服吸いなんし』つて、そう言つたもの」

「あ、そう。会えたのか、へえー。よかつたなあ」

「ありがとうございました、親方。でね、高尾がこう言うんですよ」

「何だつて」

「来年三月十五日に年季が明けるんだから、その時には、眉毛落として、齒にかね染めて、主の元へ参りんすに、わちきのような者

でも主の女房はんにしてくんなますか』とこう言うんざあますけど、  
一体あちきはとうしたらいいんでありんしょう」

「ほら、馬鹿、な、よせつて言つたら、おめえ。ほんとにまとも  
な人間一人駄目にしちゃったよ、おめえ（笑）。いいか、よく聞け、  
な。何で花魁っていうか知ってるか、花の魁さくらがけって書くんだよ。花の  
魁と書いて花魁って読むけどな。悪口にな、人を騙すんだ、花魁っ  
ていうのは。狐や狸と違つて、尾がなくても人を騙すから花魁って  
いうんだよ。上から下まで言うことは一緒だ、馬鹿野郎。何言つて  
やんだい、てめえなんかのどこにかみさんなんて来るわけねえじゃ  
ねえか、馬鹿」

「だ、だつて、もらつたもん」

「何もらつたんだよ、勘定書か」

「違う」

「何」

「これ、あの、えーつと、お金が入つてて、これ、あの、後日の  
証拠にと簪を抜いてくれました」

「高尾があ、おめえに？ おいおいおい、ほんとか、おい。ちょ  
つと中、調べてみる、ええつ。うん、何、幾らだい。三十両。おい、  
これ、三十両入つてゐるつてよ」

「そうですよ、三十両つて言つたもん。あつ、大変だ」

「何だい」

「これ、親方、引き算すると儲かります」（笑）

「何を馬鹿なこと言つてんだい。ふざけたこと言つてんじゃねえ  
よ、この野郎、ええつ。だーめ、駄目、触つちや駄目なんだよ。何  
があるか分からないんだよ。いいから、俺に預けときゃいいんだよ、  
何があるか分からないから、手なんか触るな。会えたなあ」

「はい」

「夢が叶つたなあ」

「はい」

「勤け」

「はいっ」

ほーら今度は大変だ。来年三月十五日に高尾が来る、来年三月十  
五日に高尾が来る、来年三月十五日に高尾が来る…。もう誰も、久  
藏とも、久公とも言わぬい。

「おーい、来年三月十五日（笑）、飯食つて、しょんべんして寝ち  
やえ」

「はあ、それじゃあ皆さん、来年三月十五日」（笑）

その年も暮れて、睦月、如月、弥生と来て、真ん中の五日、いい  
お天気で、結構な四つ手の黒塗りの駕籠、エッホイコラ、エッホイ  
コラ、ホイコラ……。よそ行きの鳴きでもつて、駕籠がこう親方の  
うちの前へピタツと。垂れを開けるつてえと、何と市丸の丸鬘で、  
眉毛を落として、歯にかね染めた高尾がすうーつと立つた。小僧が  
掃除してた。

「丁稚ていぢどん、御当家に久藏はんと申す方がおりんす。わちきが来  
たと伝えてくんまし」

「親方」

「よせよ、もう。うちは評判なんだ、近所で、おめえ。まともな  
人間がいねえつて。久藏だけでたくさんなんだ、おめえ。小僧くら  
いしつかりしろよ、こん畜生。何だい」

「来年三月十五日が来ました」

「何言つてんだ、おめえは。三月十五日は、十四日の次は十五日  
なんだよ。何が。ええつ、高尾？ 馬鹿野郎、高尾なわけねえ…。」

うおつ、おーい、久蔵、高尾が来たぞ」

二階にいた。ウワァーッ、もう名状しがたい声を上げたかと思うとね、梯子段、ダダダッと駆け下りてきて、そのまま親方の頭の上を飛び越して、

「何しやがんだ、この野郎」

バァーン、バァーンと下りて土間に足が掛かる一足、二足、三足目には、もう腰からぐずぐずと崩れちゃって、高尾の帯んとこすがるよ、

「花魁、花魁」

「三月十五日さましよ」

「はい。待ってたんです、あの、待ってました」

「久はん」

「はいっ」

「元氣」

こーりや一人や二人、ヨッなんて言ってもいいんだろうけど……  
こーやって、二人がめでたく一緒になる。さあ、大変だ、これからだ。これでもって久蔵が脇に店出して、そこで高尾がおかみさんでもって、二人でもって染め物屋を出した。これが江戸で大変な評判になって、

「ゲンちゃん」

「うーん」

「聞いたかい」

「何が」

「三浦屋の高尾」

「何」

「知らねえのかよ、久蔵ってよ、あの紺屋の職人のとこによ」

「あつ、聞いた聞いた聞いた、聞いたよ、驚いたよ、おめえ。何だつてよりによつて紺屋の職人なんか選んだんだ、おい。ええつ、なあ」

「なあじゃねえんだよ。聞いたら、その高尾が惚れるだけの訳があるんだ、久蔵っていう職人もえらいんだよ」

「どうえらい」

「どうえらいって、おまえ。三年働いてね、三年働いて貯めた錢をね、ブワァーッと使ったつうんだ、おめえ。ここだよ、おめえ。俺達は貯めねえでちよびちよび行つてただろ（笑）。ちよつと入ると行く、あれ駄目なんだよ。貯めて、ドーンだよ」

「ああ、そう」

「見るも法楽つてえのは驚くぜ、おめえ。えつ、行くだろ、店へ。ただだよただ、えつ。高尾が俺達に向かつて、『また来てくんなまし』なんつうんだよ、行かなきゃしょうがねえ」

「おい、よせ、江戸つ子だろ。見るは法楽、ただなんて、みつともねえまねすんな」

「そりや分かった大丈夫、こつちはちゃんと考えてる。行く時は必ず何か染め物を持って行くんだよ。行く時、会いたいと思つたら染め物持つて行くだろ。うち、今もう真つ青だもん（笑）。全部藍に染まつちやつてんの、紺色。もう今日何にも染める物ねえんだ。しょうがねえから、禪ぜん」

「汚ねえなあ、おい」

「じゃ、行くか」

つていうんでね、門前市を成したと申します。高尾、この二人、子供ももうけて、共白髪まで仲睦まじく添い遂げたと申します。江戸の名物、紺屋高尾の一席、お終い。（拍手）

### ◎質疑応答

小菅華代(学生) テレビとかで男性の落語家はよく見るのですが、女性の落語家はいるんですか。

立川談春 今、いるんです。いるんですけど……、ちゃんと答えませぬ、ただ単に乱暴な人だと思われると困るのでね。

落語というのは全部男の目から作ったものなのです。だから、今の高尾にしてもそうだし、男の理想とする女性像なんです。男の夢物語の部分があるわけです。だから、リアルな女性じゃない部分がある。男が、こういう女がいてくれたらいいよな、こういう女なら幸せにしたいよな、こういう女なら甘えられるよなという、そういう女性像なんです。それを女の人がやると、とっても嫌らしくなる。その意味でいくと、やはり男尊女卑というのはあったのかもしれないけど、男尊女卑というような薄っぺらいものの考え方じゃなくて、どこかで全部が男の目で見ているから。

だから、女の人はいます、いますけれども、女の人が落語家になりたいというんだったら、やはり女の目で見えて違和感のないというか、受け入れられる落語を作らなきゃいけないんだろうけど、それは伝統芸能の一つではあるから、伝統というのを前提に考えた時に、それは一朝一夕じゃできない。女性がやると、才能関係なく損なことが多いということで、いかがでございましょうか、カヨちゃん。

小菅 ありがとうございます。

立川 誰かいないか、周りで、女で落語家になりたいっていう人。いないな。じゃ、どうもありがとうございました。(拍手)

立川談春(たてかわ・だんしゅん) 一九六六年、東京生まれ。一九八四年立川談志に入門。一九九七年真打ち昇進。若手実力派の落語家として現在大活躍中。ご夫人は文芸科卒業生です。

教室の仮設の舞台ながら、すばらしい熱演でした。談春さん、ありがとうございます。その熱演を編集部の責任で文字化して掲載しました。紙幅の都合でマクラなどは割愛、質疑応答も一部省略しました。談春さん、ごめんなさい。